ひとつハ文字のなりひとつは文字しく〳〵しるや詠よ
みえあらハ文字やそのつゝくなるむれ心こもり是
則業平の哥乃さまや大かた思ひなき人さへ詠
うらなる情そとふひかれ人にもそのひにあひく
文字の露としてありさるとそん心つきるまゝく
ゆるへしいかにも此哥ハ何それのかれ道とれの人の
此すかたちのあはれんとよく思ひ入て吟味
あるへしさる道ハ定家卿ハ歌の哥とちからハこの
哥と業平の讀かしそれの心よみかりて哥
凡骨（ぼんコツ）を捨てあんしてへしと申されたることなむし

一むかし男ありけりけさうしける女のもとに 愚
女を思ひかくる事をけさうするといふ也女ハ二条の
后なり 肖 詞よろしからすや示后 愚 皆よ同
玄 けさうしあるとハ思ひかくれや業平の好
色の名誉なる道ハやるをつかはしてけるを
ひしきといふものをやるとて 愚 皆よみぬへし
肖 海草や文なとの使よそへてやるへし
むかしハ文を結たるものに花につけてありける 玄
ひしきハ海の藻也 袖中抄に鹿尾菜(ひしき)又ハ六味菜(ひしき)
としけつまと文字の音よりにつかはせるなるへし

ひろふハ文字のなかにも字面をしらてしらぬや詠よ
みてあしくれも字面やとのつゝきなさむれ心こもらぬ是
則業平の哥乃さまのや大かたに思ひかゝる人さへ詠
うちなかはそれとひとつもれ人よ志のひよあしく
字面の露ともうく成りなるをまん心ちなかよく
作るへしいつよもさ此哥ハ河音れのゝ河そまへとれの人の
作すかなるのあと思ひとよく思ひ入て吟味
よくへしさて其ハ定家卿ハ点の哥をもあんよハこの
哥と業平の詠ありしうちの心よみなりてて家
凡骨（むコツ）を捨てあんともへしと申されるとなむ

一むかし男ありけりけさうしける女のもとに　愚
女を思ひかくれすをけさうするといふ此女ハ二条の
后なり　肖　詞よくきこゆや業后　愚　皆ニ同
皆　けさうしけるとハこひとくれや業平の好
色の名誉なき也ハいやなとにつかりてけりと
ひしきといふもののをやるとて　愚　皆ニ同す
肖　海草や文なとの使よそへてやるならすあるへし
むかしハ手つから相手ともしたかりしなるか　皆
ひしきハ海の藻や　袖中抄に鹿尾菜（ヒシキ）文六ニ味菜（ヒシキ）
としけりを文字の音をかりてやるなるへし